



蓬田村公民館報
 (蓬 門) 第88号
 発行所
 青森県東津軽郡
 蓬田村公民館
 印刷所
 株 新印刷興業

＜世帯と人口＞

世帯数	982
人口	男 2,344
	女 2,421
計	4,765
(48.11.30現在)	

「蓬 門」原稿募集
 「蓬門」の原稿を募集いたします。
 どんな事でもよいです。原稿を送って
 下さい。

原稿送付先
 蓬田村教育委員会

見 て じ ゃ る

私の名を双松と云ふそうな。

私はなんでもよい。

私の生年月日も勿論枯れ果てることも知る人はあるまい。

それでいいのだ。

長い風雪に耐えて生き、成長したことを私自身知つてい
 る。

欺瞞だらけのものは生き、正直者が死んでいることも知
 つている。

それが世の中だと誰かが云ふ。

私は黙つてそれを見てござる。

誰れも知らないことを見てござる。

年頭の辞

村長 坂本大博



新年おめでとうございます。

親愛なる村民のみなさまには、ご健勝のうち、昭和四十九年の輝やかなし新春を迎えられましたことを心からおよろこび申しあげます。

そして、これを機会にわが蓬田村が、今年もまた一段と活発な行政を展開し、村民の生活の安定、福祉の向上に寄与するよう、みなさま共々決意を新たにしたいと存じます。

ご存知のように、こんにち行政の営む作用は、住民生活の隅々にまで及んでおり、その内容も年々複雑多様化し、且つ全体として巨大なものになってきております。

加うるに経済の伸展、社会生活の変化の加速化は、あらゆる行政に対して、遠き慮をもつて時代の要請をいち早く看取り、問題を先取りする積極さをもつべきことを要求しております。

さて、ここでわが村の現在における行政水準を分析すれば、県下一いや日本一を誇るに足るものが沢山あり。

そのいくつかを申し上げれば、まず幼稚園の入園料が年間わずか千五百円で運営されていることであります。

次にスクールバスの運行であり、四台の大型バスにより保育所幼稚園、小中学校の児童生徒の通園通学はもとより、村内各種団体の主要事業特に老人の集団健康診査や学校参観、運動会にいたるまで村民の利便にも供し、真に学社一体の効果をおあげております。

消防行政の面においては、八部落全防団にポンプ自動車を配置し、しかも広域消防を設置して医療急救車を常備、緊急対策に万全を期しております。

さらに電話の普及は一戸当り約九五%の普及率を誇り、全村有線放送の施設とあいまつて、全国水準を大きく上まわつて過言ではないと確信しております。

次に新しい年の抱負を申し上げます。

第一に、中学校新築工事の完成とともに、教育内容を整備することであり、特に音楽、語学、視聴覚教育施設設備については、全国に誇れる内容のものを計画して、おこましく、都市と地方との教育格差を是正し、新しい時代の要請に対応するとともに、生徒自身の意欲の向上を図り、教育効果をより充実することが

当面の目標であります。

第二点は、道路行政についてであります。まず村道舗装は特に蓬田小学校線、広瀬高根線、且つは中学校道、瀬辺地開拓高根の連絡道路の完成、また北部地域の森林軌道跡地掘下げと蓬田駅以北の鉄道踏切の改善に伴う連絡側道の整備を進めます。さらには青森、蟹田間の東海岸外周バイパス早期実現を図り、産業開発と交通対策を積極的に推進する他、農村環境整備事業のモデル地区指定の導入に全力を注ぎ、全村的な生活環境整備実現を期したいと考えております。

第三点は、蓬田漁港の局部改良工事の着工と大規模草地造成事業の促進、またトレンジャー及び農業用ブルの活用による完全乾田化と合理化経営の促進対策をすすめます。

第四点には、民生福祉の向上、特に村内患者輸送対策、第五点には無公害企業誘致、村内観光資源の開発産業未開発面の検討等、あらゆる施策を積極的に推進し、出鱈目のない個々の世帯を単位とした経済対策に、明るく豊かに住みよ、倅せいつばいの村造りに全力を傾注する所存でございます。

思うに、わが村がこのような立派な行政が飛躍的に進展しつつある基礎は、村民一人一人が昔ながらの豊かな人情を失なわず、しかも代々の諸先輩が村民一体の「和」の力で築きあげてきた村民性であります。

こうした強固な基盤に立ち、古きを知り、新しい各団体の組織力と村民をはじめ村内外各層の協力を結集し、時代に即応した村造りを推進してまいりたいと存じます。

つ余裕充分であります。超過課税等は絶対的ではありません。申すまでもなく課税は法律によつてなされまから取ら、公共事業により赤字だから取るという筋筋のものではありません。この点はご心配ご無用ですからご安心いただきましてどうか村民一人一人がよりよく村政にご理解とご認識をたまわり、ご遠慮なく、進んで村行政にご参画下さるようお願い申し上げます。

年頭の辞

蓬田村議会議長

柿崎喜代作



昭和四十九年の新春を迎え謹んで村民の皆様にお祝ひ申し上げます。古い諺に「治に居て乱を忘れず」というのがございます。これはどんなに平和な時世にも必ず争乱の生じることがある。どんなに物資の豊富な時世にも必ず物の不足を来す時期がある。だから其の時に際して困らぬように常時耐乏生活にも堪え得る心掛けが必要であるという訓えだと思はれる。往時の武將は汗往坐臥、これを心掛けて生活して来たようだし我々の青少年時代にも精神修養などという名のもとに、こういう訓を

受けた記憶がある。翻つて現下の時世を振り返つて観るとどうであろう。昨年二月第二次円の切り上げが行はれて以来、早くも一部物資の流通機構が乱れ始めて物価は高騰の一途を辿り同年十月中東戦争の勃発に端を発しアラブ諸国の石油供給削減作戦が行はれるや、我が国の産業は周章狼狽なす所を知らずと言つた様相を呈するに至つて居る。これは必畢するに治に居て乱を忘れた政治の誤りにより、同じく治に居て乱を忘れた国民の消費生活の馴れによるもの。他ならないと思う。持たざる国に生れて持てる国の資源に依存しなければならぬ我が国の産業経済は今後一層困難化するものと思はれる。我々は今や治に居て乱を忘れるの決意も新たに益々深刻化すると思はれる耐乏生活に処して動ぜざる覚悟が必要であると思う。

国民健康保険について

健康保険とは

健康で文化的な生活のために!!
わたしたちは、いつどんなときに病気をし、ケガをするかわかりません。病気をし、ケガをすればお医者さんにかかります。
お医者さんにかかれば、当然お金がかかります。お金がかかるのがいやだからといって病気をケガの治療をしないわけにはいきません。またその結果、生活が苦しくなることもあるでしょう。

相互扶助の精神!!

それには、日ごろからそれぞれの収入に応じて、お金を出し合い、その中からお医者さんへの支払いをしていこう。そうすれば、イザというときに安心してお医者さんにかかるという考えが生まれました。つまりお互いに助け合おうという考え方で

この考えにもとづいてつくられた制度が「健康保険」です。

この制度を維持していくためには国民が一人残らず、なんらかのかたちで保険に加入していなければなりません。

「病気などしたこともない。医者世話などにはならんから、お金を出す必要はない。これは損だ。」と思う人もなかにはあるかも知れません。しかし、これはまちがいです。生きている人間、いつ病気をし、ケガをするかわからないからです。健康保険には、いろいろな種類が

あります。それをひつくるめて「医療保険」といつています。

この医療保険は、大きくわけて地域保険と職域保険とになります。職域保険はいろいろな職業によつて区別されていますが、地域保険は住民を対象としたもので、これを「国民健康保険」とよんでいます。

保険給付

病気をケガをしたときに保険証をもつてお医者さんに行けば、治療費の三割を自分で負担し、残りの七割は国民がお医者さんに支払うこととなります。

保険給付には法定給付と任意給付があります。

法定給付 病気をしたりケガをしたときに保険証でお医者さんにかかることとなります。

任意給付 お産のときや、死亡があったときに支給されます。

昭和四十七年度の蓬田村の国民健康保険の状況

昭和四十七年度の蓬田村の国民健康保険の世帯数は、七六八世帯で被保険者は、三、四三六名になっています。

四十七年一ケ年で、国民健康保険の皆さんがお医者さんにかかる金は八二、〇〇〇、〇〇〇円です。このうち、一部負担金として、被保険者の皆さんが、直接お医者さんに支払われる金は、二一、〇〇〇、〇〇〇円、のこりの金は、国保（役場）が支払うことになります。皆さんからいただく税金の最高限度額は一世帯で八万円と昭和四十七年度は一〇名ありました。ところが八万円以上国保（役場）からお医者さんに支払いした世帯は二五六世帯もありました。五〇万円以上の世帯が七世帯あり、最高は七〇万円支払いしています。

次に、皆さんからいただく税金と医療費として国保（役場）がお医者さんに支払うする金についてお知らせします。

被保険者一人当りの税金は七、一七三元となつています。医療費として被保険者一人当り一七、五五八円支払うことになりました。

昭和四十八年の一月から老人医療の無料化制度（自己負担分はタダ）ができましたが国保で支払う分の七割はタダではありません。

国民健康保険税は高くなりましたが、それ以上に給付額もあがっています。

病気をケガをしたときのことを考え、この制度をよく理解し、一人の未納者もないようにしたいものです。

昭和四十七年度の国保の決算は次のようになっています。

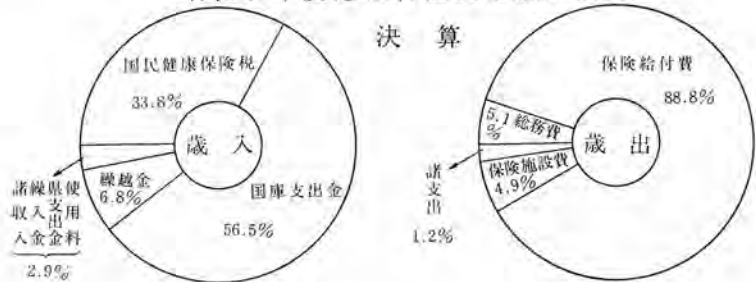
民生課 国保

時効になつたかけ金を納めて老令年金を

国民年金のかけ金は、二年をすぎると時効になつて納めたくても納めることができなくなつています。

皆さんのなかには、国民年金のかけ金を何かの事情で長い間、納めなかつたために、すでに時効にかかつ

昭和47年度蓬田村国民健康保険税 決算



◎時効になつたかけ金を納められる人は

現在、国民年金に加入している人はもちろん、過去に加入していたが現在は加入していない人も多くあります。

また国民年金に当然加入することになつていながら加入の手続をしていない人がこれから加入手続をしたときに納めることができます。かけ金は一月九〇〇円です。役場国民年金係までおいで下さい。

第六回高令者学級開く

師走の迫る十二月二十四日午前十時から中央公民館において第六回高令者学級が開かれた。

今回は趣きをかえ「村の明日を語る」タイトルのもとに村長はじめ村の有識者を囲んで話し合いの場を開くことになった。

村長から現在、明日への行政について話をし、学級生に話し合いのヒントを与えた。

教育長から教育の全般についておが村の教育の在り方を発表され、更に公民館長から本日はダメメキ会の方向に進めたい考えておるので、日頃考えておることを遠慮なく村長、教育長、議長等なんでもきいて下さい。とあいさつがあり討議に入つた。

討議内容概略は次の通りである。年寄りはんなどではまるなどの風潮が段々おこるようだが、どのような方向で教育してゆくか。機会ある毎に青年や婦人を通して年寄りに対して考え方を教えあうように向上させておる。日本一の蓬田の経済について

現在なら三百万の収入が必要とされておる。蓬田では米三百俵以上売っている家は四十一戸ある。他は殆ど農外収入を求め外なし。

各家庭においての教育が必要である。年寄りの在り方

趣味をもつこと。多少遊びに歩き茶の相手を求め可きである。

要望

老人ホームの建設する考えはないのか、公民館建設が先か老人ホームが先か県からの要望もあるし、よく議会とも相談して決めて行きたい。

青年学級開講式

昭和四十八年度青年学級(和・洋裁、あみ物教室)十二月十一日午前十時から中央公民館において開かれ



向ふ四ヶ日全日制として開講することになった。

今年は若妻の学級生が多く特色とされている。

式が終つて東青教育事務所長谷川方先生の青年の生活設計についてと題して有意義な講話をなされ十二時に終つた。

講師 和田 中
洋裁 野 藤
あみ物 青 木

**蓬田小学校道改良工事
広瀬高根村道改良工事完工式
自治功労者表彰式典挙行**

十二月十日十時玉松公民館に於て蓬小道改良工事、広瀬高根村道改良工事完工式、併て四十八年自治功労者表彰式を挙行した。



(蓬田小校線)



(広瀬高根線(第二工区))

(広瀬高根線(第三工区))

工事報告

蓬田小道改良工事 延長三四〇m
工事費 五、九八〇、〇〇〇円
施工者 志田建設KK

広瀬高根村道改良工事第二工区
延長 五四〇m
工事費 九、五六〇、〇〇〇円
施工者 鹿内組KK

広瀬高根村道改良工事第三工区
延長 二、四〇〇m
工事費 二六、〇〇〇、〇〇〇円
施工者 志田建設KK

自治功労者

特別 小野 清 七
職員十五ヶ年勤続 小野 富士雄
同 佐藤 洋子

一般

張 間 勇 張 間 鉄 男
桜 田 正 三 郎 倉 谷 平 八 郎

感謝状

山 谷 俊 雄 古 川 武 雄
稲 葉 慶 五 郎 稲 葉 武

祝辞

青森土木事務所長
蟹田警察署次長

懇親会に移り盛會裡にお祝をして幕となつた。

自衛官募集

昭和四十八年度第四次二等陸士、二等海士及び二等空士採用試験の期日及び試験場は、次のとおりです。

試験期日 開始時刻 試験場

一月八日 午前十時 青森駐とん地

二月十二日 午前十時 青森駐とん地

三月十二日 午前十時 青森駐とん地

詳しくは、役場係にお問合せください。

行政相談について

苦情なくし、明るい生活をしていただくために行政相談員制度があります。行政相談員制度は昭和三十六年七月に設けられました。当初は行政苦情協力委員と呼んでいました。昭和三十九年制定の行政相談委員法により、行政相談委員となりました。

蓬田村の行政相談委員は、蓬田の吉崎慶次郎先生です。国に対する苦情をおさがるに相談ください。

家計簿講習会

蓬田村婦人学級では十二月二十二日午前十時から中央公民館において家計簿の記帳について講習会を開いた。

講師は青森県農協中央会普及課長津川正一先生の指導のもとに理論体系から実務について勉強した。師走で忙しくなにかとせわしいとまではあつたが、学級生多数参加し生活の合理化のため講習を受け、物価のうなぎ上りと物不足に対処する心控いが出来、生活の設計の組立が出来たようだ。

児童手当支給対象範囲の拡大

児童手当支給対象範囲の拡大は、昭和四十九年四月一日から実施され満十八才未満の児童を三人以上で、その中で義務教育終了前の児童三人目以降の児童に支給します。詳細は役場民生係へ問い合わせ下さい。

豊水放談

あけび

ナンジヨ (謎)

問 チャケ(小さい)とき男で、大きくなると女になるもの。

答 あけび

▲あまり品がよさそうでないから村史発表を控えた。

子供の頃、ろばたで焼きイモを食ながら謎かけして遊んだ頃はあけびのことも答は解けても単に暗記しておるに過ぎず、そのもの意味など解るすべもない。

大人になり隠くされた意味も解るようになったら、ろばたの都に入るようになる。

長く人間を経営している中にさまざまの隠語も解つて来るし、子供のとは答が正解であっても本質的な意味を解していないことも知つた。そこに子供の純心があるものとも……

▲豊作のぶどう、凶作のあけび、こんな言へ伝えがある。私は本質的語源の理論体系は知らないが、古人は永い経験の中から身を以て体得したものだ。

現代の技術、科学から割り出したらずぐ体係づけるであろう。

農民にとって、あけびの豊作は有難いことではなかった。

▲初秋の澄切つた或る日青森市の高原に登った。目的は勿論あけび採りだ。

あけびの豊作か、枝豆をもぎとる程ぶら下り行動範囲の狭い私ですら一時間位でりんご箱二ツ以上採った。

青森市を眼下に見下ろし、津軽半島を一眺の場所に昼食の陣をとった。

▲「せまい日本そんなに急いでどこへ行く。」

交通安全標語の入選作である。何年頃の作か忘れたが……

我が村も津軽線を越えて整備したほ場が立つと広いなアと思うときがたま／＼あった。

一眺する台地に立つと実に狭いと思つた。中山系からひばりつきムツ湾沿に細長く帯状に北に走っている黄色く伸びておるのは我々が耕作している生活基盤たる水田地帯である。「せまいなア、小さいなア」と心で叫びだ。

こんな狭いところで、なんのかんのかと騒いでおる姿を連想しておかしくなつた。多分に高原の酒の精かも知れないが……

▲釈尊が悟空を己の手のひらに乗せ「悟空よ、汝の神通力を以て何日かゝるともこの指の先を越してみよ」と云つた。悟空心の中でせせら笑い飛び立って、何日飛んだかこの位で指先如きはとづくに越しておるだらうと思ひ下りたところ、なんと中指の一の節も越せずそのまん中位に下りたと云れている。釈尊の教の

広さ、深さ、教の偉大さを語つたものだろうが、

そんなに急いでどこい行く。つく／＼感ぜさせられた。

大倉岳、岩木山頂から眺めるとき更に小さいく、山の裾からすぐムツ湾の青さが見えどこが村落かどこに耕地があるのか発見さし出来ない。

▲蝸頭蝸牛の掌い、人間族の情けない半面も感じた。

第五回高令者学級

秋植え球根の植え方

講師 桜田 正三郎

十二月十二日午前十時から中央公民館において第五回高令者学級を開いた。

会員は男女四十二名出席し、秋植え球根の植え方について鉢、土、球

今年の水稲は予想を裏切り六〇K、八〇K落ち込んだ。

親父族は一樣に青くなつて吐息をついている。

今年も過ぎたことで仕方ないにしても来年はあけび如きもの一つも実らんでも米の増収をして挽回せんと心の片隅みを通り抜けてゆく……

根を準備し、実演を通しての講習で会員は熱心に勉強し、鉢、球根を無料で与い、各家庭に持帰り実技を通して植付けることにして一同喜んで散会した。

第十回蓬田村青年団体連絡協議会定例総会(12月16日)

健全な心身と郷土愛を培おうというスローガンのもとに活動して来た一年間をここに振り返つてみた。四月から八月まではスポーツを主体に活動し各種大会に出場。交通安全の願いを胸に村民の声を背に於て懸念を走つた駅伝大会。初めての試み九月の文化祭。納屋の奥底から出て来た手斧、ひと抱えもある大きな鉄瓶、おじいさんの作つたなつかしい薬杓。長い眠りから目を覚ました郷土品が展示される。十一月は岩手山国立青年の家での三日間のリーダー研修。毎日暮らしている地域を離れ、初めて第三者の私達の住む村のすぐれていいる点はどこか、又遅れている点はどこなのかと考えてみる。昭和四十九年度は健全な心身と郷土愛を培おう。友情の輪を広げよう。これら二つのスローガンのもと、会員相互の交流をはかり次代の郷土にない手として地域社

会に目を向けた活動をしていきたい。

昭和四十九年度役員を退出

会長 森 秀夫
副会長 坂本佐兵衛 越田佐代子
体育担当 加藤 継悦 泉谷 洋子
文化担当 越田 希悦 木村 修
大宮 正志

情宣担当 古川 正行 田中 吉治
女子担当 坂本 文子 藤田 寿
監事 坂中 正一 八戸 良幸
会 計 青木 倉元
書 記 張間 悦子
事務局長 坂本 信義
事務局次長 福田 春美

日本赤十字社員 増強運動にご協力

日本赤十字社は、人道と博愛をモットーとする奉仕団体で、社員と篤志家によつて結成されており、日本赤十字社法により国際的な組織にもつながつています。

日赤の事業は国際条約で決められている事業のほか、国内的には苦痛の軽減、健康の増進、病気の予防など極めて広範です。

しかし、これらの事業の推進にはまず財源の確保が必要のため、一人でも多くの人たちに赤十字社員になつていただこうと、毎年社員の増強運動が行われています。

県支部では、四十九年度の運動期間を二月いっぱいとし、社費六千二百万円を募集の計画ですが、当蓬田村分區でも県支部の基本線に添つて社員の充足をはかり目標額を今年もぜひ達成したく、部落会長、民生委員、日赤協賛委員の奉仕者が毎戸をまわりますので、みなさんご協力をお願いいたします。

日赤蓬田村分區



